

「ツアラアトのきよめ」

ルカの福音書 5:12~16

はじめに

聖書に記された出来事の中には、大小様々な病気を患った人が登場しますが、その中にツアラアトというものがあります。聖書翻訳の歴史においてこの病はかつて「らい病（ハンセン病）」と訳されていましたが、近代の発達した医学、そして考古学の見地からそれは誤解、誤訳であるとされ、今日確認されているどの病とも当てはまらない「重い皮膚病」とし、「ハレルヤ、ホサナ、アーメン」などと同じように、あえてこれを訳さず、原語であるヘブル語の発音のまま「ツアラアト(צִרְעָתָא)」と表記するようになってきました。これは大変喜ばしいことです。もっともっと多くの言葉がそうなれば、聖書はますますヘブル語で理解する必要性が大きくなり、良いと私は思います。さて、このツアラアトは、人の皮膚に発症するだけでなく、衣服、織物、皮製品（レビ記 13 章）や家の壁（レビ記 14 章）にまで生じるもので、律法にはこの病に関する詳細な教え、規定が記されており、明らかに他の病とは一線を画する、特別な病、症状、現象であったことがわかります。今日はそんなツアラアトに秘められた、そしてそれを癒されたイエシュアの御業に表された神のご計画について述べたいと思います。

ツアラアト、これが聖書で最初に登場するのは出エジプト記 4:6 です。まずはこれにまつわる一連の出来事を見てみましょう。

出エジプト記【新改訳 2017】

- 4:1 モーセは答えた。「ですが、彼らは私の言うことを信じず、私の声に耳を傾けないでしょう。むしろ、『【主】はあなたに現れなかった』と言うでしょう。」
- 4:2 【主】は彼に言われた。「あなたが手に持っているものは何か。」彼は答えた。「杖です。」
- 4:3 すると言われた。「それを地に投げよ。」彼はそれを地に投げた。すると、それは蛇になった。モーセはそれから身を引いた。
- 4:4 【主】はモーセに言われた。「手を伸ばして、その尾をつかめ。」彼が手を伸ばしてそれを握ると、それは手の中で杖になった。
- 4:5 「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】があなたに現れたことを、彼らが信じるためである。」
- 4:6 【主】はまた、彼に言われた。「手を懐に入れよ。」彼は手を懐に入れた。そして出した。なんと、彼の手はツアラアトに冒され、雪のようになっていた。
- 4:7 また主は言われた。「あなたの手をもう一度懐に入れよ。」そこで彼はもう一度、手を懐に入れた。そして懐から出した。なんと、それは再び自分の肉のようになっていた。
- 4:8 「たとえ彼らがあなたを信じず、また初めのしるしの声に聞き従わなくても、後のしるしの声は信じるであろう。」
- 4:29 それからモーセとアロンは行って、イスラエルの子らの長老たちをみな集めた。
- 4:30 アロンは、【主】がモーセに語られたことばをみな語り、民の目の前でしるしを行った。

4:31 民は信じた。彼らは、【主】がイスラエルの子らを顧み、その苦しみをご覧になったことを聞き、ひざまずいて礼拝した。

イスラエルの民がエジプトの地で奴隷となっていた時代、神はその民の苦しみの叫びを聞かれ、預言者モーセを起こされます。神は彼とその兄アロンに上記の「しるし」を与え、これによりイスラエルの民を神を信じ、従う民とされました。そこに聖書で最初のツアラアトがあります。つまり、聖書を読む限り、モーセは地上で最初にツアラアトになった人ということになり、そしてその本来の目的は、イスラエルの民が神である主を「信じ」その御言葉を「聞き、ひざまずいて礼拝」するようになることを目的、意図したものであることがわかります。そのような事実を踏まえた上で今日の内容に入ってまいりましょう。

1. 全身ツアラアト

ルカの福音書【新改訳 2017】

5:12 さて、イエスがある町におられたとき、見よ、全身ツアラアトに冒された人がいた。その人はイエスを見ると、ひれ伏してお願いした。「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります。」

5:13 イエスは手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐにツアラアトが消えた。

5:14 イエスは彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのため、モーセが命じたように、あなたのきよめのささげ物をしなさい。」

イエシュアの御前に「全身ツアラアトに冒された人」が現れました。この人のツアラアトは身体の一部ではなく、頭の先から足の先まで、全身を覆うほどのものでした。そう聞くと私たちはこの人の病がいかにかに重篤で、いかにかに汚れに満ちているかと考えてしまいます。しかしその考えは大間違いです。聖書は、神はそのようには語っておられません。

レビ記【新改訳 2017】

13:9 人にツアラアトに冒された患部があるときは、祭司のところに連れて来る。

13:10 祭司が調べ、もし皮膚に白い腫れものがあり、その毛も白く変わり、腫れものにむき出しの肉が盛り上がっているなら、

13:11 それは、そのからだの皮膚にできた慢性のツアラアトである。祭司は彼を汚れていると宣言する。彼を隔離する必要はない。彼はすでに汚れている。

13:12 しかし、もしも、そのツアラアトが皮膚に生じて、祭司が目で見ると、ツアラアトが頭から足まで患者の皮膚全体をおおうようなことがあるなら、

13:13 祭司がそれを調べる。もし、そのツアラアトがその人のからだ全体をおおっているなら、祭司はその患者をきよいと宣言する。すべてが白く変わったので、彼はきよい。

このように、ツアラアトという病、現象は、常に汚れのみを指すものではなく、もしそれが人の全身、すなわち「頭から足まで患者の皮膚全体をおおう」ものであるならば、それはなんと「きよいと宣言する」べきものなのです。つまりイエシュアの御前に現れたこの人は、ツアラアトによって汚れた人ではなく、

きよめられた人だったのです。ではなぜこの人はイエシュアに向かってきよくしてください、「**お心一つで私をきよくすることがおできになります**」と言って求めたのでしょうか。その理由はいたって単純です。彼が聖書を正しく読んでいなかった、モーセの律法を正しく教えられていなかった、真実が歪められ、偽りが教え込まれていたからにはほかなりません。ですからここでもしこの人が「主よ、私は汚れています（レビ 13:45）」というようなことを言ったなら、イエシュアは「あなたはツアラアトについての規定、律法の教えを読んだことがないのですか」と叱責されたことでしょう。しかし彼はそのようなには言わず、ただ「**主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります**」とだけ告白しました。イエシュアに対するこの言葉は真実であり、否定すべきものではないので、彼の信仰の言葉をイエシュアはそのまま用いて「**わたしの心だ。きよくなれ**」、そうだ、わたしの望み、わたしの喜びはあなたがきよくなる、きよくあることだ、と言われたのです。そしてイエシュアはこの言葉を言われるよりも先に「**手を伸ばして彼にさわ**り」と、彼に触れておられます。なぜなら彼のツアラアト、彼の身体はすでにきよい状態にあったからです。もし彼が汚れているならば、イエシュアは以下の命令、教えに逆らったこととなります。

イザヤ書【新改訳 2017】

52:11 去れ、去れ。そこから出て行け。**汚れたものに触れてはならない**。その中から出て行き、身を清めよ。【主】の器を運ぶ者たちよ。

イエシュアは完全にきよい御方だから、汚れたものに触れてもその影響を受けないのだと言う人がいますが、それはまるでイエシュアは罪を犯しても無罪だ、何をしても赦される、と言っているようなものです。たしかにイエシュアはパリサイ人や律法学者たちの教える口伝律法については、それは「むなしい人間の命令、教え（マルコ 7:6）」であって神からのものではないとし、大いに逆らわれましたが、モーセの律法をはじめとする聖書に記された教えに反するようなことは一切なさいませんでした（ヘブル 4:15）。つまりこの「**全身ツアラアトに冒された人**」はモーセの律法において、つまり神の目から見て、すでにきよいもの、触れて良いものであったということです。

2. ツアラアトが消えた

では「**すると、すぐにツアラアトが消えた**」という、この出来事は、一体どのように解釈すればよいでしょう。もちろんイエシュアが触れたことで実際に病としてのツアラアトの症状が癒されたとも考えられますが、聖書はここではツアラアトがきよめられた、癒された、とは記していません。ここで「**消えた**」と訳されているヘブル語のサーラー(הָרָץ)は本来、「背教、背信」すなわち神に逆らう、神の教えの道から逸れる、離れることを意味する言葉なのです（申命記 13:5）。今日の冒頭で本来のツアラアトのそのしるしがイスラエルの民を神に信頼させる、礼拝させることを目的としたものであることを述べました。ですからこのツアラアトがサーラー「**消えた**」とは、ヘブル語の視点で見るとそれは病が癒されたというような喜ばしいものではなく、イスラエルの神から離れる、背くというような意味を秘めた出来事だということです。イエシュアはこのツアラアトの人に対し、「**だれにも話してはいけない**」と言われました。ここにはサーファル(סָפַר)「数える、目を留める（創世記 15:5）」という言葉が使われており、つまり誰をも目に留めるな、人に、人間の教えに耳を傾けるな、そしてただ「**モーセが命じた**」、聖書に記された律

法にのみ目を留め、これに従いなさいと言っておられるのです。しかし、状況はこのイエシュアの指示にサーラーすなわち背く、反するもの、逆らうものとなりました。

ルカの福音書【新改訳 2017】

5:15 しかし、イエスのうわさはますます広まり、大勢の群衆が話を聞くために、また病気を癒やしてもらうために集まって来た。

5:16 だが、イエスご自身は寂しいところに退いて祈っておられた。

「しかし、イエスのうわさはますます広まり」とあるように、このツアラアトの人は、「だれにも話してはいけない」とイエシュアの言われたことに従わなかった、背いたのです。しかし彼のその不従順、イエシュアへの反抗が「大勢の群衆」をイエシュアのみもとに集め、その御言葉を彼らが聞き、またその病が癒されるという結果を生みました。そしてこの「大勢の群衆」がイエシュアを求めて集められた場所、そこは人のいない「寂しいところ」つまり人の住まない「荒野」でした。ヘブル語でそれはミドゥバール(מִדְּבָרִים)、「神の御言葉、ダーヴァール(דְּבָרִים)を聞く場所」という意味を秘めた場所です。

3. 大勢の群衆

今日の出来事にたとえられた、表された神のご計画の「型」がお分かりいただけるでしょうか。その解き明かしはこうです。まず全身ツアラアトの人とは、イスラエルの民を表しています。彼らは神のご計画において初めから選ばれた、聖別された、神の聖なる民、きよい存在なのです。しかし彼らはこの人のように人間の教えによって聖書を正しく理解していません。ですからモーセの律法にも、生ける神の御言葉であるイエシュアにも従うことができませんでしたし、今日においてもそうです。しかし彼らの不信仰、イエシュアへの反抗が、聖書を、その福音を異邦人のもとへと渡らされる結果となったのです。つまりここに記された「大勢の群衆」とは、私たち異邦人の教会の「型」です。そして私たちはやがてイエシュアが「祈っておられ」る所へと集められます。それはこの地上ではなく、天の父なる神の座しておられる所です。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

8:34 だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなして下さるのです。

今日もイエシュアは私たちのために「神の右の座に着き…とりなして」すなわち祈ってくださっています。やがてそこに私たちも引き上げられる、携挙されることになるのです。その事実が、神のご計画が今日の箇所にはたとえられているのです。そしてそれは、具体的、究極的には以下の御言葉の成就をも指し示しています。

Ⅱテサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

2:3 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。

やがて「不法の者、すなわち滅びの子」と呼ばれる獣、反キリストが現れて自らをイスラエルのメシア、キリストであると偽り、イスラエルに自分への礼拝を強要し、彼らをまさにサーラー「背教」へと導きます。そしてその後に異邦人の教会はイエシュアのみもとに集められます。すなわち空中に携挙、引き上げられ、イエシュアと御使いの軍勢とともに天へと上ることになります。今日の箇所にはその具体的な事実がたとえられているのです。このように神のご計画は、信者未信者問わず、誰の目にもはっきりとわかる形で起こります。そしてこの教会の携挙は、イスラエルに大きなねたみを引き起こすものともなります。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

11:11 それでは尋ねますが、彼らがつまずいたのは倒れるためでしょうか。決してそんなことはありません。かえって、彼らの背きによって、救いが異邦人に及び、イスラエルにねたみを起こさせました。

11:12 彼らの背きが世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らがみな救われることは、どんなにすばらしいものをもたらすことでしょう。

今日の冒頭で述べたように、ツアラアトとは本来、イスラエルの民を神に従わせ、ひれ伏させ、礼拝させることを目的とした言葉ですから、最後には彼らも聖書を、御言葉を、つまりイエシュアを正しく理解し、これに聞き従うようになり「彼らがみな救われる」のです。まさに「神の賜物と召命は、取り消されることがない（ローマ 11:29）」とあるとおりです。上記のパウロの言葉は、まるで今日の箇所を要約しているかのようです。そしてパウロはこれら神のイスラエルと異邦人の教会に対するご計画を指してその文末にこう表現しています。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

このように、神はイスラエルの賢さや強さではなく、逆に愚かさや弱さを用いて、本来はイスラエルの敵であり滅びるべき私たち異邦人を逆に救いへと導き、そしてその最後にはやはり選びの民イスラエルをも救うというご計画をお持ちなのです。これは誰をも誇らせない、どんな人間にも栄光を帰させない、ただ神だけがほめたたえられ、神だけに栄光が帰されるもの、まさに「神から発し、神によって成り、神に至る」ご計画なのです。人が信じるから、人の信仰の力がこれを成すものではありません。私たちがこの神のご計画を、神ご自身を信じる、信仰するのは、それが必ず成就、実現するもの、信じるに足る、信ずべきものだから、信じても絶対に裏切られることのないものだから信じるのです。ですから重要なのは私たちの信仰ではありません。今日述べた、たとえられた、必ず成就する、神が成し遂げられるご計画です。そしてそのご計画はこの地上に「神の国、御国」を建て上げます。神の御子、メシアであるイエシュアはその王であり選びの民イスラエルがこれに聞き従い、私たちもまた同様にこれにつながります。身体は永遠の肉体へと造り変えられ、そして完全に主を知る者、主イエシュアに聞き従う者となります。私たちはいつもいつまでも主とともに生き、ともに住まい、喜びと楽しみに満ちた日々を生かされ続ける者となります。そこにはもはや悩みや苦しみ、怒りや嘆きはなく、求めるものは何でも与えられます。そのような世界、そのような時代がやがて必ず訪れるのです。ただ「神の国」を求め、その到来を待ち望みましょう。